

人間として文化的に生きる

卒業にあたり、十一年間を振り返って

津守 真

今年六年生を卒業する三人の子どものうち、二人は二歳のときから十一年間この学校に通った。私は十一年前に大学人としての生活から、毎日を子どもたちの中で生活する者となった。ちょうど同じ年月をこの子たちと過ごしたことになるので、特別に感慨深い。

十一年前には、こんなに盛大な卒業式をしてこの子たちを送り出せるとは予想していなかった。養護学校が義務制になり公立養護学校が全国に普及した現代に、小さな私立養護学校が果たして存続できるかどうかも分からなかった。私が大学で研究し、教えてきたことが、実際の教育の場にどこまで通用するのもかも未知であった。親たちがそれをどれだけ受けいれてくれるのかも分からなかった。子どもたちがこの小さな建物と庭の中で、長い

年月を飽きずに過ごせるのかどうか自信がもてなかった。それほど、あの当時、未来は不確かだった。そんなときに会うことになった二歳の子どもたちが、いま十二歳になって私共の学校を卒業する。

原点

日常生活の基盤が変わらない。ときには惰性を伴う安定の中では、未来は予想しやしい。その基盤が変化するときには、私が生きること、また仕事をするこの原点に立ちもどることが必要になる。そうしなければ、不確かな未来に立ち向かうことができない。

私はひたすら子どもが主人公である学校をつくりたいと思った。学校は、子ども自身が生活し、成長する場である。そのことに徹しようと思った。戦わねばならない多くのことが私共の中にあつた。自らの内に、そして同時に職員みんなの中に。職員室を開放すること、壁に絵をかくこと、鍵をなくすることなど、どのひとつをとっても、大人たちの間に葛藤があつた。子どもの側からみて、ここが本当に子どもが主人公となって生きる場になっているかどうかを、私共はいつも問わねばならない。

教育は理念だけでなされるものではない。身体をもった人間の日々の営みの実際だから、戦いは常に継続している。一寸気をゆるめると大人の都合のよいように流されてしまう。

私は何を学んだか

私は毎日子どもたちの中で身体を動かして過ごす生活を学んだ。そこには考える材料が満ちていることを知った。とりとめのないようにみえる一日も、私自身の貴重な人生のひとつまである。人間として生きるのに大切な徳がすべてそこにふくまれている。

ただ私共の身体が考えに追いつかない。身体の調子がよくないときには特にそうである。そんなときにも、子どもたちと応答しはじめると元気が出て一日が過ごせてしまう。保育者はだれもがそうらしくて、子どもたちに力づけられて保育者は生きてしまう。

ことに、子どもは身体の行動によって、その悩みや願いを語っていることに気が付くと、子どもとの応答がたのしくなる。子どもと過ごす一日は心のコミュニケーションの連続となり、そういうときの一日は忽ちに過ぎる。

職員たち

ひとりの人がどんなに頑張っても、それだけでは学校は成り立たない。保育の現場では、ひとりの人はひとり分のはたらきしかできない。私の学校にはいつも大体三十人の子どもがいるが、十人程の職員とボランティア実習生たちのひとりひとりが、原点に立って自分が出会う子どものひとりひとりと向き合わなければ、一日は成り立たない。ひとりひとりが誠実に子どもとかわるときに、保育の場の全体がダイナミックに動きはじめる。

何かことが起きたとき、職員会で、原点に立った発言をしてくれる職員の存在は貴重で

ある。眼前で事態を収める対策に終始するのでなく、本当に必要なことは何かを皆に思い起こさせ、別の視野からものを見ることを、そういう人は可能にしてくれる。こういう職員たちに支えられて学校の歩みがある。

親たち

この学校の親たちは、この子たちを連れて遠くから通ってくる。通学途中の電車やバスの中で子どもが走り回ったり、大きな声をあげたりもする。こうして十一年間も通うのは大変な努力である。それは子どもたちにとっては大きな社会教育の場である。母親たちは、学校にきて担任の先生たちと話すのがたのしみなのだと言う。私たちも、日々の小さなことを母親たちと話すことによって、自分の見方を確認する。

もしかしたら、もっと設備のよい、もっとよい指導をしてくれるよその学校の方が親子にとって良いのではないかと、私は途中で考えたこともある。人からそう言われたこともある。その度に私はこんな風に考えた。それはそうかもしれない。ただ、この親子と出会うことになったのは、まぎれもない現実である。その現実を優しく大切にすることは、比較を超えた、私共の生きる道ではないか。ここに来て今日の日を互いにたのしく過ごせるようにしよう。そうしている間に、十一年間経ってしまった。その親たちに励まされて今日がある。

子どもたち

この十一年間に子どもたちはここで成長した。

最終の段階になって気付かされたことがいくつもある。

Sくんは何年間にもわたって、裏庭でホースの水を激しく出していた。もっと違うことに誘えないものか、途中で何度も疑いを生じた。近頃、よく見ていると、ホースの水で直線を描き、矩形を描いている。幼稚部のころ、画洋紙に四角や対角線を描いていたことがあった。この子のホースの先は絵筆であり、裏庭全体が画洋紙である。ホースの絵筆はこの上なく力動的で可塑性に富み、立体的である。私共の疑いを超えて、子どもは自分の活動を作り上げている。

A子さんはHくんを見ると眼を輝かせて近づいてゆく。そんなとき、私はもう不要である。六年生になった子ども同士の間には友情が芽ばえている。

T子さんはいろいろな事情で、今度卒業を待たずに施設にゆくことになった。いつも不安定な高い所に上っていたその心の奥には、将来への不安が深くかくされていたことがうかがわれる。大人の手をしっかりと握ってはなさないこの子のゆく先に、幸があるようにと願わずにいられない。

これから——私自身のこと

私は、愛育養護学校の前身である障害の幼児のグループにかかわるようになってから四十

五年になる。

その頃から比べると、この分野の変化は大きい。その当時は養護学校も特殊学級も殆どなかった。施設をつくり、施設に入れるのが子どもにも親にも幸せと考えられた。そして、施設にいったときに困らないように、身の自立をさせることが障害児教育の目標と考えられた。そういう考えは子どもの本質を見る眼を曇らせる。

いまは、障害の子たちと親たちの生活様式が、以前とは著しく異なる。私共の学校の親たちの大部分は、子どもを施設にあずけることなどほとんど考えていない。もっと、家と身近な社会の中で一緒に生活するようにしたいと考えている。私はその考えが良いと思う。そして普通の教育と同じように、子どもの存在感と能動性を育てることが、初等教育の基本であると考ええる。（現代の学校教育はそうなっていない。）

四十五年前に私がお世話した子どもたちのある人たちは、早い時期に施設に入り、その両親がすでに亡くなった方も少なくない。その人たちが幸せな一生を全うするようになるということは、依然として現在の教育・福祉の分野の専門的課題である。歴史の過去の責任を負わなければならないのは、まずその間を生きてきた年長者である。

私は、十一年前に愛育養護学校に専念する者となったが、子どもたちの中で毎日を過ごす楽しさの中だけにだけはいられなくなった。施設（御殿場コロニー、社会福祉法人野菊寮）の大人たちの生活ともかかわる。これは私共夫婦にとって新しい仕事なので、未来は未知である。私共にとってというだけでなく、この分野がこれからもっと人間を育てる分野として発

展してゆく時代にさしかかって、専門的にも未知なことが多い。そして、この古くて新しい専門領域に挑戦する若い人たちがいることは社会の希望である。

愛育養護学校の子どもたちの保育にはこれからもかわりつつけるが、新しい仕事加わって、人間の一生涯の視野の中で、保育と発達とを考えつつける者になりたいと思う。

自分自身が、人間として文化的に生きる者となることは、いずこにあっても、だれでも課題である。

(愛育養護学校)

